

就学前後の連携探る

旭川

発達支援で関係機関研修

旭川

幼児期から就学期の子どもたちへの支援のあり方をテーマとした「子ども発達支援合同研修会」が15日、旭川市民文化会館で開かれた。昨年に続いて2年度。市子ども発達支援連絡会議、道教育大特別支援教育プロジェクト

トなど5団体が共催。市や幼稚園、保育所、通所施設、小中学校などの関係者約340人が参加した。

障害のある子もない子ども地域の学校で共に学ぶ「インクルーシブ教育」のための取り組みを文部科学省が進め

ていることについて、道教育大旭川校の安達潤教授らが報告した。その後、参加者は3つの分科会に分かれ、

保育園や学校など現場の報告を元に議論した。就学前後の関係機関の連携について、うまくいった例とその逆の例の報告があり、参加者は「特別支援教育について早い時期から保護者と相談し、不安を少なくするべきだ」「書類の引き継ぎだけでなく、小学校の担当者が療育現場を見学す

ることで子どもへの理解が深まる」など、意見を述べ合った。

主催団体の一つである旭川地域児童デイサービス等連絡協議会の広岡輝恵会長は「子どもと保護者への支援が就学時に途切れないような態勢が必要。研修会を開催することで、地域の関係者が現状と課題を共有できるようにしたかった」と語っている。

(田辺恵)



子どもの発達支援について、関係者が意見を出し合った合同研修会